

マイワシ太平洋系群の今

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産総合研究センター
	公開日: 2024-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 谷津, 明彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009773

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



マイワシ太平洋系群の今

所 長 谷 津 明 彦



復活しつつあるマイワシ資源の現状と課題についてまとめました

最近、釧路沖でマイワシの漁獲が約20年ぶりに復活したことがテレビや新聞で盛んに報道されています。今年も、日本の大型まき網漁船が昨年に引き続き道東に集結する模様で、好漁が期待されます。マイワシははじめ多くの浮魚（うきうお）類は資源が増加すると分布域も拡大します。そこで、マイワシを中心に浮魚類の漁獲量変動と関連情報についてまとめてみました。

図1のように、浮魚類の日本の漁獲量は長期的な変動を示しつつ、優占する魚種が入れ替わってきました（魚種交替）。この原因には諸説ありますが、レジームシフトと呼ばれる「気候と海洋生態系の構造転換」と関連した現象と考えるのが主流です。その気候の代表はアリューシャン低気圧の活動です。マイワシが多かった1930年代と1980年代には、アリューシャン低気圧が強く、親潮が南下し日本は寒冷な気候でした。最近の10年間は、アリューシャン低気圧はやや弱い傾向にあるものの、マイワシは徐々に回復し、カタクチイワシは減少傾向にあります。また、日本のカタクチイワシと同期した変動をしてきたペルーのアンチョビーも漁獲量が最近不安定になっています。マイワシが激減した原因は、1945年と1988年の寒冷レジームから温暖レジームへの転換でしたが、近年のマイワシやマサバ太平洋系群の増加は資源管理（獲り控え）の効果が大きいと考えられています。

マイワシ資源は気候変動の影響を特に大きく受けるため、

管理効果について世界中で議論が交わされてきましたが、環境か乱獲（資源管理）かという対立ではなく、両方とも重要というのが結論です。

最新の水研センターの調査船調査によると、マイワシ太平洋系群の2015年生まれば、近年ではケタ違いに多く、今年の夏の道東への来遊が期待されます。ただし、このまま1970年代後半のようにマイワシが爆発的に増加するかどうかは、気候が寒冷レジームに移行し、継続するかによると考えられます。2015年には寒冷レジームになったという説もありますので、今後の推移を注意深く見守る必要があります。また、養殖魚の餌として重要なアンチョビー資源の不安定化に伴い、魚粉価格も上昇しています。日本のマイワシは1980年代には大部分が魚粉に加工されていたため、長期的なマイワシの利用方法を検討する時期だと思います。

その一方で気になるのは、三陸・道東沖の公海域（日本の200海里のすぐ外側）で中国漁船が2015年に急増し、水産庁取締船が視認しただけでも194隻となったとのことです。これらの漁船は様々な網漁法などにより浮魚類を多獲しているとみられます。マイワシ太平洋系群とマサバ太平洋系群は、生まれた年の春から秋に北西太平洋の公海域を生育場としているので、この影響が懸念されます。地域漁業管理機関の下で、これら漁船の操業実態を明らかにするとともに、国際的な漁獲ルールを検討が必要です。

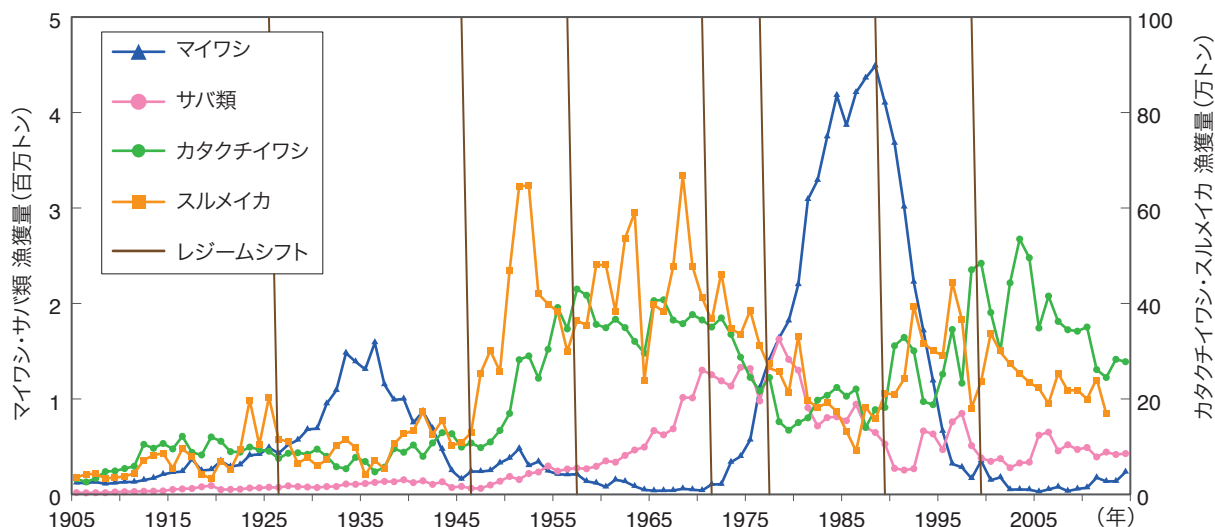


図1 主な浮魚類の日本の漁獲量の推移とレジームシフト年